

名誉顧問のコモンセンス

怨望論 2

「怨望」をなくすには



草鞋を売る金次郎

さて、成人して家を復興した金次郎ですが、さらに、21歳(文化5年・1808)のとき、母の実家川久保家が貧窮するとこれに資金援助をします。大活躍です。翌年には二宮総本家伊右衛門跡の再興を宣言し、基金を立ち上げました。その頃、小田原藩で千二百石取の家老をしている服部十郎兵衛が金治郎の破格の活躍を見て、思い切って服部家の家政の建て直しを依頼します。金次郎は五年計画で服部家の財務を整理して千両の負債を償却し、余剰金三百両を贈り、自らは一銭の報酬も受け取りませんでした。この評判により小田原藩内で二宮金次郎の名前が知られるようになりました。

このように、尊徳先生の教えは、経済と道徳の融和を訴えて、「私利・私欲に走るのではなく、先ず社会に貢献すればその徳はいずれ自らに還元されて、社会も自分も報(むく)わ

れる」と説くものです。これを「**報徳思想**」といいます。それで世間は尊徳を「報徳先生」といいました。

報徳先生は、天明7年(1787)に生まれて安政3年(1856)に亡くなっています。この報徳先生生誕の「1787年」はフランス革命の2年前です。でも、特に関係はありません。

諭吉翁は、天保5年(1835)に生まれて明治34年(1901)に亡くなっています。諭吉の生年の1835年にはアメリカで作家マーク・トゥエンが生まれています。亡くなった1901年には音楽家のヴェルディが亡くなっています。どちらも、特に関係はありません。

尊徳は諭吉よりも50年ほど前の世代の人ですが、尊徳が69歳で亡くなったときに諭吉はもう二十歳でしたから、経世家として既に有名な報徳先生から何らかの思想的影響は受けていたことでしょう。ひょっとすると、諭吉の「怨望」嫌いは報徳先生譲(ゆず)りかもしれません。でも、諭吉の書に報徳先生の業績については一言も触れていません。これも、不思議なことです。

怨望の原因とその解決法

報徳先生が一番心配しているのは、配下の下積みの下級役人たちの心情です。担当の村そのものが疲弊して、村人たちが困窮しているのに、上の役人たちはその責任を下役の役人に押しつけてきます。こういった不満を持つ怨望癖の部下の役人たちの声が報徳先生にも聞こえてきました。

「小碌(しょうろく:安い給料)の臣下(やくにん)、必ず云わん、『大夫以下在職の輩(ともがら:上司たち)は俸碌(ほうろく:給料)我が輩に十倍せり。今は減少すといへども、豈(あに:どうして)、困窮、我が輩の如くならんや。人の上に居り、高碌を受け、他の艱難を察せずして、我が輩たちには『艱苦に安んじ、専ら忠義を励むべし』とは何ぞや。執政(担当の役人)の任たるもの、仁政を行ひ、国の憂患を除き、艱難を救い、衰国をして再び盛んならしむるもの、其の任にあらずや。若し其の任に在て、些事(このこと)を為すこと能はずんば、何ぞ速(すみ)やかに退職せざるや』と云う。是、部下の役人や村人たちの **怨望、止(や)まざる所以(ゆえん:理由)なり**。 【『報徳記』165頁】

そこで、それを聞いた貧村の担当の役人たちが報徳先生に、「その怨望をなくすにはどうしたらよろしいでしょうか」と訊きます。先生は、答えます。それに対する先生の答えが、また、恐ろしい……。役人の給料を「全額返納しろ」というのです。

「**惟(ただ)、汝の恩碌(給料)を辞せん而已(のみ)**。衰国を再興せんとするに、先づ恩碌を辞し、『聊(いささ)かたりとも用度の一端を補ひ、無碌にして心力を盡さんこと某の本懐なり』と主君に言上し、一藩に告げて以て碌位を辞し、国家の為に萬苦を盡す時は衆臣〔仲間の役人たち〕必ず曰ん、『執政、国の為に肺肝を砕き再復の道を行ひ、恩碌を辞して忠義を励む。然るに我が輩〔ともがら:なかまたち〕、国家に力を盡さずして空しく君碌を受く。豈(あに:意外な感じでどうして)、之を人臣の本意とせん。仮令(たとえ)、令碌の十ヶ一を受るも、[碌を辞した]大夫に比すれば、過ぎたるにあらずや』と。 【『報徳記』166頁】

積年の **怨望** (えんぼう:うらみ)氷解し、初めて、[他の役人たちも] ①素餐(そさん)の罪[功績も才能もないのに高い位にいて報酬を受けること]を恥るの心を生じ、②日々活計の道に力を尽くし、③他を怨(うら)みず、④人を咎(とが)めず、⑤如何なる艱苦をも安んじ、⑥之を常とし、⑦之を天命とし、⑧自らの婦女子に至るまで其の不足の念慮(ねんりょ)を去らん。然らば、則ち、①一藩を諭(さと)さずして、②当時の艱難に安んじ、③忠義の一端をも励ま

んとするの心を生(しょう)ぜん。是、無難の時に當り、大夫たるもの上下の為に一身を責めて人を責めず、大業を行ふの道なり。然して、惟(ただ)之を行ふ事のあたはざるを憂(うれい)とせり。此の道を行はずして人の上に立ち、高祿を受け、弁論を以て人を服せしめんとせば、益々、**怨望 盛にして、国家の殃(わざわい) 彌々(いよいよ) 探きに至らん**。何を見て衰国を挙げ上下を安ずることを得んや」と。 【同】

この役人、報徳先生の言うとおりにしました。ここに於て先生、その一家の扶助のため米粟(べいぞく:穀物)を贈り、其の艱苦を補いました。先生は、言ったことに必ず責任をとります。

道元禪師も貧しさを奨励

どうやら、「財産」と「怨望」とは切っても切れない関係にあるようです。「財産」が人間形成において重要な役割を果たすことを、禪においても、道元禪師が「貧しさ」について次のように語っています。

学道の人は第一に必ず貧しくなければならない。財産が多いと必ず(道を求める)志を失ってしまう。在家(一般家庭)において学道する者は、いまだ財宝(財産や宝物)に囲まれてよい住まいを求め、親族にかかわっているので、たとえ道を求める志があっても道の障害となる条件が多くある。昔から一般の者で禪に参する者が多くいるが、その中で勝れているといっても、やはり僧には及ばない。僧は、一枚の衣と一つの食器のほかは財宝を持たず、住まいのことは考えず、衣類や食べ物を貪(むさぼ)らないので、ひたすら学道をする。これは、それぞれみな利益を得るところがあるからである。その理由は貧しいことが道に親しいのである。

ここで、道元は、「衣類や食べ物を貧ることが修行の邪魔になるのだ」と言っているのであって、「怨望」とは関係ありませんでした。

ラクダと針の穴

この「願いを遂げるためには、すべての財産を放棄せよ」との教えは、また、聖書にも出てきます。「ルカ伝」です。有名な「ラクダと針の穴」の譬えが出てくる箇所です。

また、ある役人がイエスに尋ねた、「よき師よ、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」。

イエスは言われた、「なぜわたしをよき者と言うのか。神ひとりのほかによい者はいない。いましめはあなたの知っているとおりである、『姦淫するな、殺すな、盗むな、偽証を立てるな、父と母とを敬え』」。

すると彼は言った、「それらのことはみな、小さい時から守っております」。

イエスはこれを聞いて言われた、「あなたのする事がまだ一つ残っている。持っているものをみな売り払って、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、天に宝を持つようになる。そして、わたしに従ってきなさい」。

彼はこの言葉を聞いて非常に悲しんだ。大金持であったからである。

イエスは彼の様子を見て言われた、「財産のある者が神の国にはいるのはなんとむずかしいことであろう。 富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」。

このお金持ちの財産放棄は、「怨望」とは関係ありませんでした。

取ると施すの仕方

政体批判 また、報徳先生は、別の箇所でも、「怨望が起きるのも、**政体自らが取ると施(ほどこ)すの前後を間違えるからだ**」と論(さと)します。ここで、「取ると施す」という、もう一つの報徳仕法が出てきます。

夫れ国家の政体は多端なるが如しといへども之を要するに **取ると施すとの二つに止まれり**。此の二つを外にして又何事かあらんや。且、「盛衰・安危」も此の二つにあり。「存亡・禍福」も亦然り。然して世上国の盛衰する所以を察せず、何を以て其の衰廃を挙げんや。何となれば取ることを先ずすれば、①国衰え、②民窮し、③怨望起り、④衰弱極る。甚しきは、⑤国家傾覆・⑥亡滅の大患に至れり。施すことを先ずする時は、①国盛んに、②民豊かなり。③人民之に帰し、④上下富饒(ふじょう)にして、⑤百世を経(ふ)るといへども、⑥国家益々平穩なり。聖人の政は仁澤を施す事を以て先務とし、敢えて心を取る事に用いず。暗君は取ることを先として施す事を悪(にく)む。治平・暴乱の由(よ)って起こる所、斯(ここ)にあらざるものなし。 【『報徳記』182頁】

これは、明らかに報徳先生の現政体批判です。政治批判です。先生は桜町仕法を宇津家にわたすときに三か村の農民に次のように言っています —

天道に従って政治が正しく明らかなきときは、①民力は進み、②田畑は開け、③米穀も産出するが、天道にそむいて政治に不正があるときには、①民力は衰え、②国家は亡び、③田畑は荒れ地となる。古語に、「四海困窮すれば天禄永く終わらん」。 【『二宮翁夜話』】

諭吉：「富貴は怨の府に非(あら)ず」

このように、報徳先生は、「世間の怨望は貧からくる」といっています。ところが、一方、後の世の諭吉は、「富貴は怨(うらみ)の府(中心)に非(あら)ず、貧賤は不平の源に非ざるなり」と断言しています。まったく、報徳先生と諭吉翁では、「怨望」に対する見解が違います。

今その(怨望の)原因(原因)を尋ぬるに、ただ窮(きゅう:行き詰まり)の一事に在り。但しその窮とは困窮・貧窮等の窮に非ず、人の言路を塞(ふさ)ぎ人の業作を妨ぐる等の如く、**人類・天然の働きを窮せしむる** ことなり。貧窮・困窮をもって怨望の源とせば、天下の貧民は悉皆(しっかい:すべて)不平を訴え、富貴は恰(あたか)も怨の府にして、人間の交際は一日も保つべからざる筈(はず)なれども、事実において決して然らず、如何に貧賤なる者にてても、その貧にして賤(いや)しき所以の原因を知り、その原因の己が身より生じたることを了解すれば、決して妄(みだり)に他人を怨望するものに非ず。その証拠は故(こと)さらに揭示するに及ばず、今日世界中に貧富・貴賤の差ありて、よく人間の交際を保つを見て、明らかにこれを知るべし。故に云く、**富貴は怨の府に非ず、貧賤は不平の源に非ざるなり**。

【『学問のすゝめ』117頁】

この報徳先生と諭吉翁との見解の違いはどこにあるかと言えば、「時代の違い」と「主旨(テーマ)の違い」にあります。

報徳先生は、「怨望」を農民と下級役人の側から、施政者を見た経済的な階級差に原因ありとします。正統な労働の価値を評価しない暗愚政治のなせる業だと言うのです。

怨望は焼き餅 一方、諭吉翁は、「怨望は、疑猜・嫉妬・恐怖・卑怯の類で、その原因は、「己が身より生じたる個人的な劣等感だ」といいます。そして、孔子の言葉「女子と小人は近づけがたし」をとりあげて、その時代に、社会的に弱い立場の女性と子供を束縛して自由を与えなかった社会的な差別が原因であるとしします。諭吉は、「そもそも孔子の時代は、明治を去ること二千有余年、野蛮草昧(文化が遅れ世の秩序が乱れていること)の世の中なれば、教えの趣意もその時代の風俗人情に従い、天下の人心を維持せんがためには、知ってさらに束縛するの権道(ごんどう:手段は正しくないが、目的は正しい道にかなうこと。目的をとげるために執る便宜の不正な手段。臨機応変の手段)をなかるべからず」といいます。このように「怨望」を、幼稚な者たちの単なる焼き餅と捉え、その生じる原因を自由のない差別の時代の「方便＝権道」のせいにしています。

この「怨望」の問題について、諭吉翁が、このように「人間の交際に害あるものは怨望より大なるはなし」で大上段に振りかぶって始めたわりには、女史と小人を対象にしたり、限定された場所の大奥で生きる御殿女中の喜怒哀楽を例に挙げて、「個人の識見の問題だ」として終えたのは期待外れでした。でも、わざわざ御殿女中を「怨望」の主人公にしたのは、そのあとで、こういった無識無学の御殿女中と無智無徳のお殿さまの世界とは反対に、「民権議院」と「出版の自由」こそが、怨望に易(かわ)るに活動をもってし、嫉妬の念を断ちて相競うの勇気を励ますものであることを言いたかったのです。従って、諭吉翁は、世の中、「自由に言わしめ、自由に働かしめ、富貴も貧賤もただ本人の自ら取るに任(まか)して、他よりこれ[怨望]を妨ぐべからざるなり」と結論づけたのです。これは、「怨望」を悪者にして、「文明は人間の交際から起きる」という、『文明論之概略』と『学問のすゝめ』の双方で主張したかった持論ですから、これはこれでいいのです。

報徳先生も「怨望」を悪む

一方、「怨望」を広く社会的な問題として捉(とら)え、「なんの方策もなく、貧困農村の救済手段を過った統治者側の失敗が、怨望を生じさせる原因だ」と強く論じたのが報徳先生です。経世家の先生には、怨望を封じる大きな責任とそれを可能にする絶対的な手法があるのです。

報徳先生 貧村の再興にかかる

報徳先生は、「怨望」の本当の原因は、農夫たちの生活の貧しさそのものから生じるものだとして、農村において、「精神の作興」と「農業経営」と「労働の分配」を施しました。これを、「報徳示方」といいます。藩から、小田原藩内の廃村寸前の農村の復興を任された先生は、まず、農民たちの勤農精神の鍛錬から始めました。村が貧しいのは、農民自身が怠惰で働かないことにあります。

先生が復興を担当した貧村の桜町へは、これまでに、村の窮乏を立て直すために担当役人が四人も五人も派遣されたのですが、「手を下す所なく、或いは、奸民の為に陥(おとし)られ、又は、衆民に逐(お)われ、数月も此の地に留まること能わず、土地の衰廃・人気の汚悪・民家の貧窮、實に極まれり」というありさまでした。先生は、断然としてこの如き難地に臨みました。

精神の作興 先生、櫻町陣屋[官舎]にあり。櫻町陣屋は小田原領分の時の陣屋なり。この陣屋の①屋椼破れ、②桂腐朽し、③四壁皆くづれ、④軒下より草木生ひ繁り、⑤狐狸・猪鹿(こりちょうく)此に居る。邑中(ゆうちゅう:村中)も之に準じ、⑥田圃(でんぼ)三分が二は茫

々(ぼうぼう)たる荒野となり、⑦僅かに民家近傍而已(のみ)。耕田存すと雖(いえど)も、⑧毎戸惰農(だのう)にして、⑨百草其の上に蔓(はびこ)り、⑩諸作は其の下に伏せり。⑪衰廃窮まり、⑫家々極貧にして、⑬衣食足らず、⑭身に弊衣(へいい:破れた衣服)を纏(まと)ひ、⑭口に糟糠(そうこう:粗末な食べ物)を食らひ、⑮耕耘(こうてん)の力なく、⑯徒(いたずら)に小利を争い、⑰公事・訴訟止まるときなく、⑱男女酒を貪(むさぼ)り、⑲博奕(ばくえき)に流れ、⑳私欲の外他念あることなく、㉑人の善事を惡み、㉒人の惡事・㉓災難を喜び、㉔他を苦しめ、㉕己を利せんことを計り、㉖里正(りせい:担当の役人)は役威を借り、㉗細民を虐(しいた)げ、㉘細民は之を憤(おこ)り、㉙互に仇讐の思ひをなし、稍(やや)、損益を争ふに至りては、㉚忽ち相鬪ふに至れり。㉛土地の衰廃、㉜人気の汚惡、㉝民家の貧窮、実に極れりと謂べし。
【『報徳記』33頁】

よくここまで悪く言えたものです。①②③……と番号を振って数えると、33ヶ条もありました。此中には、むろん、「怨望」(㉑㉒㉓)もあります。歌舞伎の助六の悪態(あくたい)よりもずっと凄いです。先生は、実際にそう思ったのでしょうか。これが、この時代の農村の醜い現実の姿だったのですから。

貧村復興の「報徳示方」

責任感が強く、自信もある報徳先生は、早速、自らの「示方」(やり方)で荒廃した村の再興に努めます。そのやり方と身の処し方はすさまじいものでした。

「農業経営」と「労働の分配」 先生、断然として比の如き難地に臨み、先ず、①[一般の農家の]民屋に住して、②[役人が住む]陣屋の草萊(そうらい:雑草)を除き、大破を補理して之に移住し、③三邑(さんゆう:桜町の三つの村)旧復の規格を立て、④鶏鳴より初夜に至るまで、日々廻り歩き、⑤一戸毎に臨んで人民の艱難・善惡を察し、⑥農事の勤情を弁じ、⑦田圃の経界を察し、⑧荒蕪(こうぶ:荒れた土地)の広狭(こうきょう:広い狭い)を計り、⑨土地の肥・⑩流水の便利を考へ、⑪大雨・暴雨・暴風・炎暑・嚴寒といへども一日も廻歩を止めず、⑫善人を質し、⑬悪人を諭(さと)して之を善に導き、⑭貧窮を撫育(ぶい)くし、⑮用水を掘り、⑯冷水を抜き、⑰勸農の道を教え、⑱荒蕪(こうぶ:荒れた田や畑)を開き、⑲諸民安堵の良法を行ふ。⑳自ら艱苦に処し、㉑衣は綿衣身を掩ふに足るを期し、㉒用うべからざるに至らざれば別衣を製せず、㉓食は一汁の外を食せず、㉔邑中に出て食するに冷飯に水を濯ぎ、味噌を嘗めて食するのみ。㉕邑民の薦食(薦める食べ物)一物も食せず。日く、「汝等惰農の為に比の如く困窮に及べり。予(われ)、千辛萬苦を盡し、汝等を安んじ、㉖汝等の衣食足る時に至らざれば、予も又、衣食を安んぜず」と。終日、㉗聊(いささ)かも休まづ、㉘夜に至り陣屋に帰り寝ること僅かに二時(ふたとき)に過ぎずして起き、㉙前日に明日の為すべき事を考へ、㉚萬事の処置少も遅留することなく、流水の卑(ひき)に下(くだ)るが如し。其の神速なること衆皆常に驚歎せり。

【『報徳記』34頁】

なぜ、先生はこんなにも我武者羅(がむしゃら)に働いたのでしょうか？ その理由は、先生と小田原侯との間にとり交わされた「日本橋・巢鴨問答」と「温泉問答」によって語られます。小田原侯から、「桜町の復興は可能か？」と訊かれて、先生は答えます —

土地瘠薄にして仁政あり 某(それがし)、止む事を得ず彼の地に到り土地と民情とを察し再復の事を考えるに、土地瘠薄(せきはく)にして人民の無頼・怠惰も亦極る。然りと雖も之を振起するに仁術を以てし、邑民・旧染(きゅうぜん:古くからしみこんでいる悪い習慣)の汚俗を革(あらた)め、専ら力を農事に盡す時は再興の道なきにあらず。而して仁政・行われざる

時は、仮令(たとえ)、年々四千石の貢税を免(ゆる)すといへども彼の貧困は見ることあるべからず。譬(たと)えば都下に於て巢鴨の地と日本橋の地の如し。日本橋の土地は屋賃如何程貴しといへども売買の利・厚きが故に人競ひて居住し富優を得る。巢鴨の如きに至りては、金銀融通・売利薄きが故に屋賃なしといへども人、之を望まず。又、貧窮を免れず。土地は貢税多しと雖も、民・其の益多きが故に繁栄し、下国は貢税なしといへども **田産薄きが故に其の艱難を免れ難し**。是、土地の厚薄の致す所なり。然して **比の如き下国をして上国と共に栄えしめんと欲せば、必ず仁政にあらざれば能はず**。【『報徳記』27頁】

風呂を炊き続ける 如何となれば、温泉は人力を得ずして周年温かなり。風呂は入力を以て炊くが故に暖か也。暫時も火を去る時は忽然として冷水となる。上国は温泉の如く、下国は風呂に似たり。故に **仁術を行ふ時は栄え、仁政なき時は衰ふ**。今、野州櫻町の衰撥を救ひ永く民を安ずるの道は他無し。①厚く仁を施し、②其の難苦を去て、③安栄に導き、④大に恩沢を布きて、⑤其の無頼の人情を改め、⑥専ら土地の貴き所以を教へ、⑦力を田圃に盡さしむるにあり。然して此の興復の用度幾千萬金なるや予め其の数を定め難し。前々、君、彼の土地再復を命ずるに、許多の財を下し玉ふ。是を以て其の事成らず。以後、之を興復せんには必ず一金も下し玉ふことなかれ」と。【『報徳記』28頁】

生命を養うもの 先生は、まず、原因も効果も分からずにお金を出す君主の失政を非難します。そして次に先生は、農民たちにも責任があるといいます。「田の水が少ない」という自らの環境の悪さのせいにして、それを自ら工夫して改めようとしないうのはなぜだ— と叱咤激励します。

「汝の邑(ゆう:村)、衰廃極るもの独り田水を失ひ農事を勤(つとむ)ること能はざるのみに非ず。何ぞ用水なくんば従前の田を畑と為し、多く雑穀を得て活計をなさざるや。豈(あに:どうして)、人命を養うもの独(ひと)り稲梁(とうりょう:穀物の総称)耳(のみ)ならん。百穀、皆、生命を養うもの也。而(しか)して、①田水乏しきを口実となし、②良田を蕪没(ぶぼつ;台なし)に帰して顧みず、③博奕(ばくぎ:博打)を事とし他の財を借り、④一時の窮を補わんとす。是れ、⑤家々絶窮、⑥遂に離散する所以(ゆえん)にあらずや」。

「抑々(そもそも)、博奕なるもの富家(ふか)と雖(いえど)も、祖先伝来の家・株を傾覆するに至る。況や貧人にして此の悪業を為す、其の亡滅、迅速ならざるを得ず。且(かつ)、田水なきを以て良田を荒し、衣食なきを憂ふ。夫(それ)、田圃は衣食の本也。其の根本を棄てて以て他に求む。尚(なお)、井を塞ぎて水を求めるが如し。何れの時か之を得んや。

「農力勸み、糞培(ふんばい:肥やし)怠らざる時は、国の有益たる田に勝されり。何ぞや。田(水田:すいでん)は[年に一度の]一作に止り、圃(ほ:畑)は[年に二度の]両毛作なればなり。汝等、農を持って業とす。素より畑の有益を知らざるには非ず。知って而して耕耘(こうん:耕す)せざるは他無し、其の労苦を厭い、怠惰を旨とし、努せずして米財を貪(むさぼ)らんとするが為め也」。

我が方法は、①節儉以て、②冗費を省き、③有給を生じ、④他の艱苦を救い、⑤各其の業を勉励、⑥刻苦・⑦終身・⑧善行を履み、⑨悪業を為さず、⑩勤動以て、⑪一家を全するにあり。

「戸々、此の如くならば貧村必ず富ますべく、廃妄の邑里(ゆうり・村)と雖も必ず興復再盛に至るなり」。

名文家高慶 凄い迫力です。こう、一気呵成に、弁々と論じられては、ただ呆れて、口

をポカンと開けて聞いているより他ありません。特に報徳先生は偉丈夫です。その長身六尺(1m82cm)と二十五貫(94kg)の大きな身体で、頭の上から朗々たる大声でまくし立てられては恐れ入るより仕方ありません。「先生の其の声、恰(あたか)も雷の如し。威風凜凜(りんぜん:りりいさま)として其の面(おもて)を仰ぎ見る者なし。流汗衣を沾(うるお)すを覚えず」というありさまです。

この「記述」を読むと、まさに先生が目の前に突っ立て怒り散らしている姿が目には浮かびます。ただしこの文章は、報徳先生に終始傳(かしず)いていた高弟の富田高慶が記したものです。高慶は相馬藩士で、先生の名声を聞いて入門しました。後に、報徳先生の妹文子の夫となる人です。入門したときは、報徳先生が五十三歳、高慶は二十六歳でした。入門前の先生の業績や具体的なやりとりは伝聞によるものです。高慶は、血縁関係があるので、いつも先生のそばにいて、いろいろな人との対談や会合や講話に接することが可能なので、それを聞き書き出来る恵まれた立場にあります。ただ、この『報徳記』は報徳先生の自筆ではないので、先生の語った言葉そのままでないのは残念です。ここが福沢諭吉が自分で書いた『学問のすゝめ』や『文明論之概略』の文章と全く違うものなので厳密には真偽の保証はありません。あとでご当人の報徳先生の検閲は受けたものと思われます。なかなかの名文で、且つ、絶好調の語り口や説得力のある話しぶりで表現されているので由(よし)としましょう。

文体は古文 高慶がこの『報徳記』を書くについて、文体をどれにしようかと決めかねている事情が述べられている文章が高慶の「まえがき」にあります。誰が読むかといえば、主に、藩のお役人たちです。それに村の有力者たちです。報徳先生と高慶は、その人たちに読ませたかったのです。

或曰、先生、畢世(ひっせい:終生)の論説・事業を記するに漢文を以てす可べしと。或る人曰わく「漢文なる者は簡古を以て是と為す。今細大の事業を筆するに至ては、[漢文が得意な]能文者に非(あら)ざるよりは、詳覈(しょうかく:詳しく調べる)ならざる所なきを得ず。故に通俗文字を以て記するに如かざる也」と。今後説に随ふ。

ここでいう「通俗文字(和文)」とは、いわゆる今で言う「古文」のことです。通達文や手紙や日記などは、この古文でかけられました。一般にはそれが分かり易くて良かったのです。むろん、いまの私たちにとってはこれでも難解過ぎます。でも、なかなか格調高い名文です。筆者の高慶は相馬藩士で教養もあり、特に優れた文学者であったことでしょう。

それに、また、難しい漢語が沢山出てきます。特に、先生が担当した農村改革に必要な、手法や農作や田畑に関する専門用語も数多く出てきます。「恵恤」(けいじゅつ:めぐみあわれむ)・「恤民」(じゅつみん:民をあわれみめぐむこと)・「溝洫」(こうえき・こうきょ:「洫」は田の水路の意。みぞ。どぶ。田と田との間のみぞ)・「孳々」(じじ:努力し励むさま)・「黽勉」(びんべん:務めを励むこと)・「莠」(はくさ:水田に生える雑草)・「磽薄」(こうはく:地味のやせていること・そのさまやその土地)・「蕪」(ぶらい:雑草が茂って荒地)などなどです。

それに、「豈」(あに)・「耳」(のみ)・「而」(しかして)・「所以」(ゆえん)・「何ぞ」(なんぞ)・「抑々」(そもそも)・「且」(かつ)・「聊」(いささか)・「稍」(やや)・「竊に」(ひそかに)などなど、接続詞を中心として読み慣れない言葉ばかりです。それに、語調を整える為に四文字熟語が多用されています。これも、諭吉翁の書物と同じです。人々に聞かせるために音読しても読みやすく、理解し、覚えやすいのです。

この富田高慶の文章も快調で、その武張った物言いが、返って報徳先生の厳(いか)めしい口調が能くでていて、演者の張り扇(おおぎ)がないだけで、まるで講談を聞くようです。これも由としましょう。慣れてくるとこの名調子に快感を覚えます。諭吉翁の書物同様、

この時代の漢語や漢文調の古文に慣れるのにはいいお手本です。その教育的効用にも感謝しましょう。

でも、これらの漢字を良く理解出来たのですから、当時の官僚はある程度の学問は修得していたのでしょう。農民であった二宮金次郎も、『四書五経』を読みました。「四書」は儒教の經典で『大学』『中庸』『論語』『孟子』をいい、「五経」は『詩経』『書経』『周易』『春秋』『礼記』です。どれも、江戸時代、必ず藩士たちは藩校で学んだものです。当時の子息たち必読の教科書でした。

でも、どうして貧農に過ぎなかった金次郎が、このような難しい本が読めたのでしょうか。また、当時、貴重であったそのような本をだれが貸してくれたのでしょうか。

金次郎の勉学の秘密

次のような話が、福住正兄の『二宮翁夜話』に載っています。金次郎が二十六歳のとき、小由原藩の家老の服部十郎兵衛の若党になります。

「小田原に至る。藩の閥家の服部氏に三男あり、皆能く書を読む、翁之を見て心ひそかに之を喜び請ふて家僕となる。夜はすなはち其の読書の傍に侍し之を聴いて倦まず、遂に四書に通じ、能く之を暗記し、又請ふて二子往学の僕となる。至れば即ち講堂の下に立ち、ひそかに講義を聴き、略(はぼ)文義に通ず」

これが、金次郎の唯一の勉強方法でした。

新井白石も、儒学の本を単独で学んだことを自伝『折りたく柴の記』で、次のように書いています。

十七歳になったとき、私と同様に出仕していた若侍の家に行き、机の上においてある本を見ると、『翁問答』(中江藤樹著)という表題であった。どんなことが書いてあるかと思ったが、借りられたので、家に持って帰って読んでみて、はじめて聖人の道というものがあることを知ったのである。以来、儒学に切実な志をもったけれども、師匠とすべき人もなかった。京都の医者で、少し学才のある人が、土屋の殿のところへ毎日来ていた。この人に学問の志のことを話すと、『小学』の題辞を講釈して聞かせてくれた。そののちまた程伊川(ていいせん)の『四箴』(しん)を講義して聞かせてくれたので、やがて『小学』の本を日夜暗誦し、それが終わると四書を暗誦し、その後また五経をも暗誦したが、これらはみな、読み方を教えてくれた師匠があったわけではない。自分で『韻会』『字彙』などの本で習い覚えたのだから、あとで考えるとまちがったことはかり多かった。

【『折りたく柴の記』桑原武夫訳中公クラシックス版42頁】

ここでも、白石であっても、独学なので間違ったことが多かったようです。農民であった報徳先生ならなおさらのことです。よく頑張りました。でも、金次郎にとっては、これは一概に間違いとはいえませんが、本来の正規な解釈とは違っていても、報徳先生の解釈がそれなりに理にかなっていれば、それは「新説」です。「新しい解釈」です。間違いとは言えません。日本人が中国の古典を読んでの、これまでになかった新しい解釈であり、その時の現実に合って実効性が高く、効果が偉大なものであれば、それが「正しい解釈」なのです。次の老子の言葉についても、なかなか良い解釈で、いかにも「日本的な老子」です。日本人がそう感じて、とても間違いとはいえませんが。

老子が「道の道とすべきは常の道にあらず」と言ったのは、「川の川とすべきは常の川に

あらず」というのと同じだ。堤を築き堰を張り、水門を立てて引いた川は大作の川で自然の常の川ではないから、大雨のときには、みな破れる川である。天然・自然の理を言ったのだ。理は理であるが、人道とは大いに異なる。人道は、「この川は堤を築き堰を張って引いた川だから、年々歳々、普請・手入れをして、大洪水があっても破損のないようにと力を尽し、もし流失したときは、すみやかに再興して元のごとく早く修理せよ」というのを人道とする。もと築いた堤だから崩れるはずであり、開いた国だから荒れるはずというのは、言わずと知れたことだ。老子は自然を道とするから、それを悪いというわけではないが、人道には大害がある。つまりは、老子の道は、「人は生まれたものだから死ぬのは当たり前のことだ、それを欺くのは愚かなことだ」というようなものだ。人道はそれと違い、他人の死を聞いても、「さて気の毒なこと」と嘆くのを道とする。まして親子・兄弟・親戚ではなおさらだ。これらの理由をもって推察すべきである。【『二宮翁夜話』54頁】

でもなぜ、報徳先生は、そこまで「儒学」にこだわって頑張ったのかまだよくわかりません。白石も文章を丸暗記したのですから、報徳先生も丸暗記したのでしょうか。それで、人にものを説くときにははすらすらと「四書五経」の文言が出てきたことでしょうか。これでは、不勉強なお役人たちから嫌がられ、「怨望」されるはずです。

諭吉翁の怨望の解決策 諭吉翁は、「怨望」を結論づけて、「ただ、人類天然の働きを塞(ふせ)ぎて、禍福の去来、皆、偶然に係るべき地位において甚だしく流行するのみ」としか言いません。従って、諭吉翁の「怨望」の解決策は、次のようです。

また人間の交際において、相手の人を見ずしてそのなしたる事を見るか、もしくはその人の言を遠方より伝え聞きて、少しく我意に叶(かな)わざるものあれば、必ず同情相憐れむの心をば生ぜずして、却ってこれを忌み嫌うの念を起し、これを悪(にく)んでその実に過ぐる多し。これまた人の天性と習慣とに由(よ)って然るものなり。物事の相談に伝言・文通にて整わざるものも、**直談にて円(まる)く治(おさ)まることあり**。また人の常の言に、実は斯くの訳なれども面と向かつてはまさか左様にも、ということあり。即ちこれ人類の至情にて、**堪忍の心**の在るところなり。既に堪忍の心を生ずるときは、情実互いに相通じて**怨望・嫉妬の念**は忽(たちま)ち消散せざるを得ず。古今に暗殺の例少なからずと雖(いえど)も、余常に言えることあり、もし好機会ありてその殺すものと殺さるる者として数日の間同処に置き互いに隠すところなくしてその実の心情を吐(は)かしむることあらば、如何なる讐敵にても必ず相和するのみならず、或いは無二の朋友たることもあるべしと。右の次第をもって考うれば、言路を塞(ふさ)ぎ業作を妨ぐるの事は、独り政府のみの病に非ず、全国人民の間に流行するものにて、学者と雖も或いはこれを免かれ難し。人生活潑の気力は、物に接せざれば生じ難し。自由に言わしめ、自由に働かしめ、富貴も貧賤もただ本人の自ら取るに任して、他よりこれを妨ぐべからざるなり。

【『学問のすゝめ』121頁】

「話せば、分かる」ですって？ 「堪忍の心」ですって？ 「給料を全額返納せよ」という報徳先生の気力に比べれば、なんともまあ、気楽な解決策です。どうも、諭吉翁が「怨望」を論じたのは、ご自身本人が世間から中傷されていたからなのでしょう。そう、思わざるをえません。まず、『学問のすゝめ』が驚くべきほど売れていたのも、大金と名声を手にした諭吉を「怨望」する者が多かったことは事実です。そんなとき、世間の「怨望爆発」を待っていたように『学問のすゝめ』の「楠公権助論」(「第7編」)が導火線となって火を噴きました。それに対して、諭吉翁は喜んで、明治七年、郵便報知新聞に檄文(げきぶん:敵の罪惡などをあげ、自分の信義・意見を述べて、公衆に呼びかける文章)『学問のすゝめの評』を慶應義塾五九樓仙萬(ごくろうせんばん)の名前で発表しました。そこには、珍しく、諭吉翁の本心が吐露されています。

【2025/04/07 都築正道】